様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　４月１２日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　２００７～２０１０
課題番号：　１９５３０５９８
研究課題名（和文）　幼児の園生活理解の発達過程：家庭での様子からの検討

研究課題名（英文）The development of kindergartners' knowledge of preschool life: An approach for examining their behaviors at home

研究代表者
藤崎　春代（FUJISAKI HARUYO）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：００１９９３０８

研究代表者の専門分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：生涯発達

１．研究計画の概要

幼稚園に３歳クラスから入園する子どもたちとその保護者を対象として、家庭で保護者に把握される子どもの様子、家庭での子どもの様子にもとづく保護者の心配とその解消へのとりくみについての質問紙調査を、卒園までの３年間にわたって縦断的に行う。また、平行して、園での子どもたちの生活の様子の観察と、保育者への面接調査を実施する。これらの資料を基に、明らかにしたいことは以下の３点である。

（１）園生活に適応していく様子や不適応に陥りやすい時期や契機を明らかにする。園生活に戸惑うのは、３歳児クラス入園直後のみではなく、４歳児クラス・５歳児クラス進級時にも、同様の戸惑いが見られるであろう。また、こうしたクラス移行時のみではなく、大きな行事などに取り組む際にも、何らかの戸惑いが生じる可能性がある。こうした戸惑いを生じる時期と契機とを、園での観察と保護者からの家庭での様子の報告から、３年間にわたって縦断的にとらえていく。

（２）（１）でとらえた適応していく時期や戸惑いの時期に、子どもたちが家庭ではどのような様子を見せるのか、家庭では園生活について何をどのように語るのかについて整理する。適応や戸惑いの様子と、家庭での様子や保護者に語る内容とがどのような対応関係にあるのかを検討することで、園生活理解のプロセスについての示唆を得る。特に、藤崎(2002)では、3歳クラス児が言語的には園独自の生活の流れについて報告できない一方で、入園２・３ヶ月でほぼスムーズに生活できていることを、園での観察や保育者への面接調査でとらえている。この両者の間のずれをどのように考えればよいかの知見も得たい。

（３）幼児の園生活理解を促し、支えるために保護者がどのような取り組みを行っているのかを整理する。幼児の園生活理解を促し、支えるための保護者の有効な取り組みを整理するとともに、保護者が有効な取り組みを行うためには保育者がどのように支援すればよいのか、あるいは外部の心理の専門家がどのように支援しうるのかを検討する。

２．研究の進捗状況

（１）入園直後の様子

幼稚園の３歳児クラス新入園児の保護者に、入園式翌日からの１週間分の家庭での子どもの様子を記録する日誌記録調査用紙を配布した。結果、入園直後から園生活を楽しみに通う＜園生活エンジョイタイプ＞、登園時は泣いているのだが、園では楽しく過ごしたようで帰宅時にはにこにこ顔で「楽しかった」と言う＜行ってみれば楽しかったタイプ＞、家族とはなれてひとりで通うことに不安を感じている様子の＜不安タイプ＞、園生活についての知識を積極的に収集しようとする＜園生活探索タイプ＞という、大きく４つのタイプが設定できた。

（２）入園１ヶ月後および３ヶ月後の様子

入園１ヶ月後の日誌記録および３ヶ月後の「園に楽しく通っているかどうか」質問に対する回答結果を分析した結果、入園後３ヶ月たつころには、ほとんどの子どもが登園を楽しみにするようになることが確認できた一

方で、園生活適応過程には、個人差のあることがわかった。
（３）家庭と園との生活時間の調整
(起床・就寝時刻、昼寝の有無)に注目して、3 歳クラス児の保護者の取り組みの様子を検討した。結果、全体傾向として早寝早起きになっており、登園時刻への適応と考えられた。しかし、この適応は容易になされるものではなく、入園前はもとより入園１年後も早寝早起きという生活時間の調整への配慮がなされていた。さらに、この生活時間の調整は、入園児のみでなく家庭全体の生活時間へも影響を及ぼしており、子どもの園生活への適応は家族全体を巻き込むものであることが示唆された。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
理由：資料収集が、園や保護者の協力を得て、当初の予定通り進んでいる。また、資料収集の途中ではあるが、入園直前から入園１年目の子どもの様子と、保護者の対応については、分析の結果、概ね移行過程を描くことができてきている。

４．今後の研究の推進方策
２０１０年度は、２００８年度の３歳児クラス入園児に対する最終調査年度である。７月と２月に調査を予定している。
上記資料収集と並行して、入園から卒園までの資料を総合して、園生活移行過程の子どものタイプの検討と、保護者が、子どもが家庭に持ち込む園生活(家庭での園生活にかかわる子どもの様子)からどのような影響を受けるのかについての検討とを行う予定である。

５.代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①藤崎春代　子どもの園生活と保護者の発達、発達、１１８、58-64、2009、査読無し

〔学会発表〕（計３件）
①藤崎春代　幼稚園３歳児クラス入園児の園生活への適応過程と保護者の援助―生活時間の調整に注目して、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月 27 日、神戸国際会議場

②藤崎春代　幼稚園３歳クラス新入園児の園生活への移行過程(2)－入園後 3 ヶ月間の家庭での様子からの検討、日本発達心理学会第 20 回大会、2009 年 3 月 24 日、日本女子大学

③藤崎春代　幼稚園３歳クラス新入園児の園生活への移行過程―保護者の保育記録の分析から、日本発達心理学会第 19 回大会、2008 年 3 月 19 日、大阪国際会議場

〔図書〕（計１件）
①藤崎春代　ミネルヴァ書房、友達とのかかわりあいを通して育つものは何か、2008、140-141、内田伸子(編)、よくわかる乳幼児心理学